



抄録集

第22回



# 日本獣医内科学 アカデミー学術大会

**JCVIM2026** Japanese College of  
Veterinary Internal Medicine

臨床×研究＝新たな一步を、横浜から

2026年2月20日(金)～22日(日)

会場 パシフィコ横浜ノース

主催：一般社団法人 日本獣医内科学アカデミー(JCVIM)

共 催：一般社団法人 日本獣医画像診断学会、一般社団法人 日本獣医皮膚科学会、

後 援：公益社団法人 日本獣医学会、公益社団法人 日本獣医師会

## プレミアムスポンサー

- ゴエティス・ジャパン株式会社
- MSDアニマルヘルス株式会社
- 富士フィルムVETシステムズ株式会社
- アークレイマーケティング株式会社
- ペットライン株式会社

最新情報はこちら

● 大会ホームページ : <https://smartconf.jp/content/jcvim2026/>



● Facebook

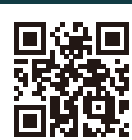
<https://www.facebook.com/jcvim/>



● X(旧 Twitter)

[https://x.com/JCVIM\\_info](https://x.com/JCVIM_info)

@JCVIM\_info



● Instagram

<https://www.instagram.com/jcvim2026/>



## 一般演題 4 (7演題) 感染症

Sat417-O4-4

携帯型リアルタイムPCR装置を用いた猫腸コロナウイルス排泄状況と関連因子の解析

佐々木 雄祐<sup>1</sup>, 佐々木 栄美子<sup>1</sup>, 近藤 寛子<sup>1</sup>, 山内 美彩<sup>1</sup>, 三谷 康正<sup>2</sup>

<sup>1</sup> さくらペットクリニック, <sup>2</sup> 株式会社ゴーフォトン

**はじめに:** 猫コロナウイルス(FCoV)には、猫伝染性腹膜炎ウイルス(FIPV)と猫腸コロナウイルス(FECoV)の2つのバイオタイプがある。FECoVは猫に広く蔓延しており、感染猫の約10%で致死的な猫伝染性腹膜炎(FIP)が発症することが知られている。FIPVはFECoVの変異によって生じると考えられており、FECoVの感染状況を把握することは院内感染対策や保護施設での管理上、極めて重要である。本研究では、全国5施設にて症例を収集し、携帯型リアルタイムPCR装置(PicoGene® PCR1100, 株式会社ゴーフォトン)を用いてFECoV排泄状況を調査し、感染に関連する因子を解析した。

**材料および方法:** 2025年3月から8月までの期間に、5つの動物病院を受診した猫159頭を対象とした。来院理由はさまざまであり、綿棒を用いて直腸より糞便を採取しPicoGeneによりFECoV RNAを検出した。加えて、年齢、性別、品種、飼育環境、FIV/FeLV感染状況などの背景情報を収集し、単変量および多変量解析を行った。統計解析には $P < 0.05$ を有意水準とした。

**結果:** 全体のFECoV陽性率は29.6% (47/159頭)であった。単変量解析の結果、年齢および品種が陽性率に有意に関連していた。多変量解析では、1歳未満を基準とした場合に有意差が認められた(オッズ比=7.060、95%信頼区間=1.850–26.900)。さらに、2歳未満で区切ると年齢に加えて品種差も明瞭となり(OR=10.700、CI=3.050–37.700; 品種OR=4.470、CI=1.050–19.100)、これらが独立したリスク因子であることが示唆された。一方で、性別や多頭飼育環境との有意な関連は認められなかった。

**考察:** Kumano & Nakagawa (2024)は単変量解析により年齢のみを有意因子として報告しているが、本研究では同データの多変量再解析を行った結果、年齢と品種の双方が独立してFECoV感染に関与することが明らかとなった。このことから、年齢および品種が相互に影響し合いながら感染リスクに寄与している可能性が考えられる。また、Klein-Richersら(2020)は、単一糞便サンプルの解析では排泄者を見逃す可能性が高く、1個体あたり少なくとも3サンプルの検査が推奨されると報告しており、今後の調査設計においても留意すべきである。

使用したPicoGene®は約30分で結果判定が可能であり、猫アルブミン遺伝子断片を利用したインターナルコントロールを内蔵することで高い検出信頼性を有する。同一プラットフォーム上でレプトスピラやSFTSウイルス検出も可能であり、動物由来感染

症の包括的監視に有用な検査基盤となり得る。さらに現在、FIP予防を最終目標として、PicoGeneによりFECoV陽性と判定された無症候性猫を対象に、サプリメント介入によるウイルス排除効果を検証する小規模パイロット試験を進行中である。本研究は、地域レベルでのFECoV感染実態の把握およびFIP予防戦略構築の一助となることが期待される。

一般演題 1 2 (6演題) エキゾチックアニマル・行動学・栄養

Sun419-O12-6

動物用サプリメントLEMPET (レムペット) による抗炎症効果の検討

加納 有紗<sup>1</sup>, 椿 直哉<sup>1</sup>

<sup>1</sup> たんぽぽキャットクリニック

【はじめに】

動物用サプリメントLEMPET (レムペット) は、シイタケ菌糸体培養培地抽出物 (LEM) とEPAを配合した製品であり、免疫賦活作用を介した抗炎症・抗腫瘍効果が期待される。今回、慢性尾側口内炎を呈する猫1例、猫伝染性腹膜炎 (FIP) を発症した猫3例、FIP治療終了後の猫4例に対し、通常治療に併用してLEMPETを使用したところ、一定の改善効果が認められたため、その概要を報告する。

【材料と方法】

2024年11月から2025年3月までに、当院および併設保護猫施設において、慢性尾側口内炎1例、FIP発症3例、FIP治療後4例を対象とした。通常治療に加え、LEMPETを3か月間投与し、その臨床経過を評価した。初月は2cap/day、以降は1cap/dayを経口投与した。

【結果】

尾側口内炎例 (雑種、8歳、避妊雌) は、全抜歯後も炎症と疼痛が持続し、プレドニゾロンを継続使用していた。LEMPET投与開始後2か月間は明確な変化はなかったが、3か月頃より口内炎および舌炎が改善し、流涎の減少と被毛の清潔化が認められた。

FIP発症例3例 (①混合型: 雑種、2歳6か月齢、避妊雌、②③ドライ型: 雑種、7か月齢、避妊雌) では、①②は発症時、③は発症1か月半前より予防的にLEMPETを開始した。いずれもGS製剤またはモルヌピラビル、プレドニゾロンと併用し、3か月後に良好な経過で治療を終了。その後3か月間の経過観察で全例が寛解に至った。

FIP治療後の4例 (①～③ドライ型: 雑種、1歳2～5か月齢、去勢雄および避妊雌、④ウェット型: 雑種、1歳9か月齢、避妊雌) は、治療終了時よりLEMPETを開始した。①②はこれまで再発を繰り返していたが、LEMPET投与により再発なく寛解に至った。③④は治療終了時にSAA低下不十分で体重増加も認められなかったが、LEMPET投与後にSAAが徐々に低下し、体重増加と全身状態の改善が認められ、最終的に寛解に至った。

【考察】

LEMPETを通常治療に併用することで、尾側口内炎およびFIPにおける炎症反応の軽減や全身状態の改善が得られたと考えられた。LEMの免疫調整作用およびEPAの抗炎症

症作用が相乗的に寄与した可能性が示唆される。今後、炎症を伴う様々な疾患やFIP再発予防への応用が期待される。